
Last Genesis

白月清夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L a s t G e n e s i s

【Nコード】

N 4 1 2 6 Z

【作者名】

白月清夢

【あらすじ】

軍人として戦争に行く克蘭。

自分の行った行動と自らの正義の矛盾に苦しみつつも、克蘭は軍人としての役割を行っていく。

そして、克蘭と戦場で出会った青色の髪の少女アルナ。

アルナはかつて克蘭と子供の時、共に過ごしたアーシャに似ていた。

孤児故に国の研究の為の実験台にされた自分と同じ道を進ませないために、克蘭はアルナを自分の家へと連れて帰る。

しかし、アルナの本当の姿は
長編SF小説。

注意書き

* 注意 *

最初にお読みになる方は【単語一覧】をお読みにならないようにしてください。

決して読まないでください。

ネタバレしてしまいます。

単語一覧は後で見直していただく時に、分からない単語などを確認して頂くものです。

基本は見ないようにしてください。

どうしても単語の意味を思い出せない時にご利用ください。

尚、単語につきましては出来るだけのネタバレを防ぐよう、一度に載せるのではなく小説更新に合わせてこちらも更新していきます。

ご理解の程、よろしくお願いします。

それでは、【Last Genesis】をお楽しみください。

単語一覧

【Last Genesis】の小説掲載予定日時は

2012年1月10日18時

となっております。

それまでお待ちください。

活動報告でも色々と小説に関することを掲載しておりますが、Twitterの方でも掲載しておりますので、よろしければご覧ください。

TwitterID: [aura_inparadox](#)（名前はインヴァイスです）

ブログも方も更新していますので、お時間に余裕のある方はご覧ください。

ブログはプロフィールの方から直接行けるリンクがあると思いますので、それをご活用ください。

稚拙な文章しかかけませんが、よろしく願いいたします。
インヴァイス

1 - 1 (前書き)

この作品は賞などに応募させていただく場合がございます。
その場合は一旦削除させていただき、落選したのを確認してから再度掲載させていただきますのでご了承ください。

赤黒く染まり瓦礫と化した建物、そしてそれを包み込むようにして舞い広がる黒煙。

ここはシドの街。多くの人がここに出稼ぎに来て賑わいを見せている。

そう言われていたのも、わずか数時間前の話だった。

それが今ではしかと見ることにさえ憚れるような場所へと化した。

目の前に広がる風景に克蘭は怒りを抱きつつも、克蘭の乗る巨大な人型の機械　　ディーバスは前へと進んでいく。

克蘭には怒りの矛先をどこへ向ければ、どうしていいのかさえ分からなかった。なぜなら、この憎む風景にしたのは、紛れもない自分自身であると分かっていたからである。

大地を噛み締めるようにて克蘭のディーバスが荒野と化した街を進んでいく。そして、それに続くようにニアのディーバスも進んでいく。

「克蘭、どこへ行くんだよ」

「……分からない」

「また自己嫌悪に陥ってるの？　諦めなよ、僕たち“チェイン・クルス”に選ぶ権利なんてないのだから」

「……………」

自分の中に巣窟する罪悪感を無意識に紛らわそうとしているのか、克蘭は歩みを止めることはなかった。

「克蘭」

「……………」

「克蘭、頼むよ。戻ろうよ」

「……………」

「よし、分かった。隊長さんの正義に付き合っただけよ」

克蘭のディーバスが歩みをとめた。そして振りかえり、ニア

のディーバスへと視点を移した。

「探そう」

「探す？」

「生存者を、だよ。これからの僕たちの任務は敵国　ノヴァのディーバスを製造しているオルター社の研究所の発見及び破壊だけど、それを捕虜をとらえるという理由で生存者を捜すことに変えてもきつと問題はないと思うんだ。

本国にも伝えて僕の方から伝えておくよ」

「ありがとう、ニア」

「いいよ。本当に、世話のかかる隊長さんだね」

ニアは微笑むと、本国へと通信を始めた。

「問題ないってさ」

「そうか」

「じゃあ探しますか」

ニアはそういうとさらに、

「まあ、生存者がいればだけど、ね」

と、付け足した。それが彼の本心だった。

クランも本当は気づいてはいた。生存者なんて、いないということ。これはニアがクランに対しての配慮というだけで、本当は見つかるとは思っていないことを。

「クラン、どうやって探そうか」

「とりあえず町を一周しよう」

「わかった」

「それから一回アナロジー・ワールドに入り、システムを生体反応が分かるアルヴォスに」

「了解」

クランは眼を閉じ、神経を集中させた。再びクランが目を開けるとそこには白色しかない場所だった。

真っ白な世界の中にドアが1つ。そしてその隣に立っているディーバス。しかし、そのディーバスは実際のように十メートル以上も

なく、クランと同じ背丈ほどだった。

クランはディーバスの前へと行き、ディーバスの目を見つめた。ここ、アナロジー・ワールドでシンクロと呼ばれるディーバスと一体化する作業を行う。

それをすることでディーバスが自分の手足のように動く。そして、一旦アナロジー・ワールドに還り、予め組んでおいたプログラムからシステムを選べば、あとは自動的にそのシステムを発動してくれる。

それが、ディーバスなのだ。

しかし制約が大きいゆえに得られる力も大きく、戦争ではディーバスが勝敗を握るとさえ謳われている。

クランはシステムをアルヴオスに変更した。静かに目を閉じ、再び目を開けるとそこは先ほどまでいた荒野だった。

「ニア」

「大丈夫。システム変更したよ」

「よし、行こう」

システム・アルヴオスは生体反応するようになっていたサーチ・システムである。ディーバスが生体に反応すると知らせてくれると共に、サーモグラフィで分かるようになっていた。

「了解」

再び重低音を鳴らして二体のディーバスは進んでいく。当然と言えば当然だろうか、何もディーバスは反応しないし、サーモグラフィも反応しない。それくらいに破壊を尽くしたのだ。それもクランが軍人として在籍している国　ダイモンが行ったのだ。

『オルタ　社の研究所のディーバスは勿論、データさえも残らないくらいに殲滅せよ』

それが上層部からの命令だった。

「クラン」

「なんだ」

「もし、見つけたらどうする」

「……さあな」

「もしかしたら、僕たちと同じようになるかもしれないね」

「そうかもしれないな」

クランが初めてディーバスに乗ったのは八年前のわずか一六歳の時だった。当時はまだディーバスに乗るパイロット　アナロジー・ワールドに入れる人間がいなかった。そこで政府は戦争で孤児となった子供を集め、強制的にアナロジー・ワールドに行かせ、シンク口させる実験を行った。そうして造られたのがクランたち、チェイン・クルスである。

チェイン・クルスたちには脊髄部分にナノ・チップと呼ばれるチップが埋め込まれており、それがアナロジー・ワールドに入れるようにするとともに、逆らうと細胞分解されるようにシステムされている。

実験台にされた時点で、死ぬか、それとも兵器として生きるかしかないのである。

願わくば、一人でも生きていて欲しい。けれども、俺たちと同じ道を歩んでほしくない。

矛盾した気持ちがクランの中を葛藤した。

「アーシャ！　お願いだ、行かないで」

「クラン、大丈夫だよ」

泣きじゃくるクランとは対照的に笑うアーシャ。アーシャの周りには白色の白衣を着た研究員たち。アーシャは屈むと、泣き崩れているクランの頭を撫でた。

「アーシャ……」

「心配しないで、私は帰ってくる」

笑うアーシャを見ても、クランは笑顔を作れなかった。幼くとも分かっているのだ。行けばもう、帰ってこないことが。

「アーシャは何にも分かっている……行けばもう戻って……」

「……そうだね。もう戻ってくることはできないかもしれないね」

アーシャ自身も分かっていた。今までにも、連れて行かれた人はたくさん見てきた。けれども、誰一人として帰ってはこなかった。「だからね、クラン。もしも私が帰ってこなかったら、迎えに来てくれる？」

「……うん」

「ありがとう。クランは優しいね」

笑うアーシャはクランの左手をとると、親指どうしをぎゅっと合わせて。

「ほら、約束だよ」

「……うん」

「だからクラン、また会えるのだから泣かないで」

アーシャはそのまま握った左手でクランの口端を上げた。

「ほら、笑って」

それがクランを励まそうとしているのか、自分自身を奮いたたせようとしているのかはアーシャ本人も分からなかった。

「そろそろ時間だ」

隣に付き添っていた研究員たちが促す。白い帽子にマスクがより感情がないように感じさせた。

「じゃあね、クラン。待ってるよ」

長い緑色の髪をなびかせる様にして、振り向いて去ってゆくアーシャ。研究員たちも振り返り奥へと進んでいく。

「アーシャ！ 行くから！ だから待っていて！」

力の限り叫ぶクランにアーシャは反応しなかった。けれども、彼女にはクランの思いが痛切すぎるほどに伝わっていた。

アーシャ。

「ラン。クラン」

「ん……」

「どうしたのさ、さっきから」

「すまない、何だ」

「生体反応があつたよ。ここらのエリアは野良の動物が多いからそれかもしれないけれど」

「どの方向だ？」

「一時の方向だね」

ニアのいう方向に向き直すと、確かに生体反応がある。しかし、生体反応が遠く、それは人間かは分からなかった。

走るようにして生体反応のある方向へと向かう二体のディーバス。ディーバスは“何か”がいるであろう方向へと、導くように指示を出していた。

近づくにつれ生体の温度と形が分かってくる。冷えているのか全体的に、寒色に反応しており、形は小さいびつな円を描いたような形をしていた。ところどころある温度差でそれが何かを徐々に分かせてきた。

冷えたいびつな円 それは小さく、丸まっていた人を示していた。

「克蘭」

「ああ、分かっている」

二人は走る速度を加速した。人と分かった場所からそこまでとり着くまでにはさほど時間はかからなかった。だが、そこにあるのは瓦礫の山、しかし生体反応は確かにそこを示していた。

「ニア、瓦礫の下だ」

「分かっている」

二人は掘るようにして瓦礫を除けてゆく。パイロットが乗るコアの部分には無重力システムアンチ・グラビティを搭載してい、ため。ディーバスでの作業ではパイロットに実質的な負荷は存在しない。だが、克蘭の乗るコアの中には粒となった汗が彷徨っていた。

瓦礫がなくなっていくと共に、生体反応が徐々に強くなってゆく。やはりこの下にいるのは間違いなかった。

そしてニアが瓦礫の中から見つけ出した。

「克蘭！ 人だ！」

瓦礫の下にいたのは、青色の髪をした少女だった。

1 - 1 (後書き)

お読みいただきありがとうございます

ツイッターの方で情報等を提供してまいりますので、よろしければご覧ください

Twitter: [aura_inparadox](#)

感想など頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4126z/>

Last Genesis

2012年1月10日18時53分発行